

# 2024 年度 活動計画

特定非営利活動法人パルシック

## はじめに

パルシックは、2024年4月現在、日本を含む世界9か国で活動を行っています。東ティモールのコーヒー生産者支援、スリランカ北部での漁民支援から始まったパルシックの取り組みは、多くの人びとに支えられながらその活動範囲を広げてきました。

活動地域拡大の背景には、紛争や大規模災害、気候危機、経済的な混乱などによって、人びとの日常や暮らしが奪われ続けていることがあります。ガザやシリアまたミャンマーなどでの紛争、温暖化がもたらす洪水・干ばつや農漁業の衰退、そして格差を生むグローバルな経済の仕組みは、社会的に不利な立場に置かれている人びとをさらに追いつめています。さらに、これほど誰もが簡単に情報を得られる社会である一方、その社会の中でもともに暮らす多様な人びとや文化の存在が希薄化しています。様々な考え方や異なる価値観に対する知識や関心、独自性に対する尊重が失われがち傾向が目立ち、社会的分断や特定集団の排除を招いています。

パルシックはこうした困難な状況に置かれている人びとがもつ力を尊重し、かつ寄り添い続けていきたいと思えます。私たち自身の置かれた状況と、活動で出会う人びとが置かれた状況は異なるものの、お互いに人と人として対等な関係でつながっていくことが、混沌とした状況の中で、今とは違う未来を創っていくためには重要だと考えるからです。そうした考えのもとパルシックは、2024年度に以下のことに重点的に取り組んでいきます。

### 1. 緊急支援と、現場のリアリティに基づく問題提起を結びつける。

パレスチナやミャンマーで、人道上也見過ごすことのできない状況が続いています。必要な緊急支援を継続するとともに、国内においては様々な広報メディアを利用し、また講演会・イベント等を通じて、現場のリアリティとその背景、そして人びとの声を日本社会に届けます。それによって、状況を変えていくために日本にいる私たちに何ができるかを考える場を提供するとともに、政策変化への働きかけも視野に入れていきます。

### 2. 生活基盤を奪われた人びとの自立的な生計と持続的なコミュニティ再建の道筋を見いだす。

上記1の2か国に加え、シリア難民・避難民、および能登半島の被災者コミュニティに対して、自立的で持続的な生活再建の道筋を、当事者とともに探り、支援に結びつけていきます。緊急支援から生活再建へと直列型に考えるのではなく、緊急状況のさなかにも人びとの中に復興への思いと方向性を見いだし、その主体性を支えていくように努めます。

### 3. 日本国内でのコミュニティとネットワークの拡大をすすめる。

フェアトレードを通じて国内の取引先や個人・団体との関係性をさらに広げていきます。そうしたネットワークが、国内における生協・地産地消・地域コミュニティづくりのつながりへと展開することに貢献していきます。みんかふえにおいては、自治体や地域で活動する団体等との連携を深め、より幅広い人びとの居場所と自然な見守りの場とするよう努めます。

### 4. 組織基盤・資金基盤を強化し、広報活動に力を入れる。

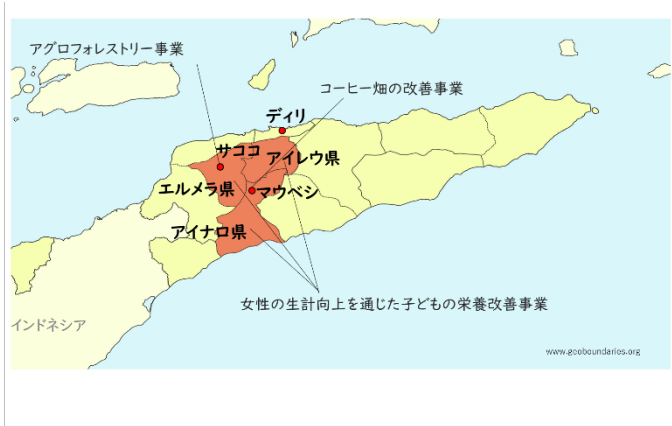
上記の取り組みのために、そしてより自由な活動へと幅を広げるために、活動を担う組織基盤を強化します。その一環として、パルシックにとっての先行的な支援経験である東ティモールやスリランカでのプロセスを振りかえり、各地のスタッフの成長に生かしていきます。また、創造的な資金運用の検討を始めます。そして、さらにより多くの人びととの関わりを可能にするために、戦略的な広報活動を展開していきます。

パルシック理事

池座剛、石井宏明、伊藤淳子、今里いさ、大野容子、中山雅之、西森光子、穂坂光彦、ロバーツ圭子

## 1. 東ティモール

東ティモールが国家歳入の8割以上を依存している石油・天然資源収益は、新たな油田開発が実現しない限りこの10年で途絶えることが明白であり、2024年においても産業・経済の多角化が課題となる。パルシックは2002年から続けてきたコーヒーのフェアトレード事業、2013年から開始したアロマ・ティモール商品の販売促進を継続しつつ、コーヒーに続く輸出農作物の特定を視野に入れ、以下の事業を実施する。



### ① コーヒー畑の改善事業

2019年11月から5か年計画で開始したこの事業は、アイナロ県マウベシ郡のマウベシ・コーヒー生産者組合（ココマウ）に加入する農家が老朽化したコーヒーの木を若返らせ、次世代が誇りを持ってコーヒー作りに携わっていただけるようにすることを目的としている。2024年度は、2023年までに畑の改善作業を開始した農家287世帯に加え、新たに18世帯を対象とし、引き続き新しい苗木の育成、有機堆肥の生産や施肥など、コーヒー畑管理の技術指導を行う。

最終年度である本年は、栽培方法やデータ管理を身につけた人材がココマウの技術普及員として活動を継続し、この5年間を通して取り組んできたコーヒー畑改善技術が事業終了後もココマウに定着するようサポートしていく。

### ② 女性の生計向上を通じた子どもの栄養改善事業

2023年3月から3か年計画で開始した本事業は、女性たちが栄養に関する知識を学ぶとともに、花卉栽培による収入を家庭での栄養改善におすびつけることを目指している。2024年度はアイレウ県、アイナロ県に加えエルメラ県にも活動地を広げ、95名の女性たちと栄養改善グループをつくり栄養知識の普及を行い、参加者は家族が必要な栄養素を摂取するための植物の栽培や養鶏、養殖などの計画を立てる。花卉栽培では70世帯を対象に、1年目の経験も踏まえた実地指導とインドネシアへの第三国研修、および水環境の整備を実施する。また、ディリの生花店と協力して切り花の市場への流通システムを構築し、女性たちが持続的に安定した収入を得られるようにする。

### ③ アグロフォレストリー事業

東ティモールで喫緊の課題となっている産業の多角化を目指すため、2019年からアグロフォレストリー事業に取り組むエルメラ県ポニララ村の青年組合コハル（KOHAR）や、東ティモール農水省が運営する農業技術学校と協働し、良質なカカオ豆の生産と市場化に向けた事業を作り上げていく。

## 2. パレスチナ

2023年10月7日以降、イスラエルによる無差別大規模攻撃によってガザ地区では未曾有の人道危機が続いている。2024年度、ガザ地区では主に緊急支援活動を行う。また、日本でも即時停戦を求める声を市民社会からあげ続けていく。さらに、ガザだけではなく西岸地区も含め、パレスチナの人たちが置かれている状況や根本的な問題について学ぶオンラインの連続講座などを引き続き開催し、より多くの日本の人びとに関心を寄せ続けてもらえるよう、ま



た、何ができるのかを共に考えていく機会を提供する。

### ① ガザ緊急支援

2023年10月からガザ地区中南部の被災者への緊急支援を開始している。2024年4月時点、停戦への働きかけはあるが、戦争が長期化する恐れがある。また停戦もしくは休戦に至った場合でも、この6か月間のガザ地区への攻撃は人的被害だけではなく、社会インフラなど人びとの生活の基盤の破壊にも及び、必要最低限の生活を取り戻すための緊急支援が中長期間必要となることが予想される。2024年度は、2023年度に開始した食料や衛生用品の提供、避難場所の環境整備などに加えて、日々変わるニーズに対応しながらガザの人びとを支えていく。

### ② ガザ地区ハン・ユニス県における小規模羊農家支援

2022年度に3か年計画で開始したハン・ユニス県における羊農家の収入向上と女性のエンパワメント支援事業は、当初の計画では2024年度を最終年として羊や生乳の販路拡大、事業対象3村の農家をつなぐネットワークの構築を予定していた。しかし、2024年4月時点で同対象村のうち比較的攻撃の少ないアル・マワーシ村の羊農家は自宅に留まることができているが、アル・マナーラ村とアル・カララ村の羊農家はイスラエルによる無差別攻撃のため避難を余儀なくされている。2024年度はガザ事務所職員および羊農家の安全を最優先としながら、羊の健康状態、飼育環境の確認、破壊された羊小屋の修復や飼料の確保などの支援を行う。また、女性のエンパワメント活動でこれまで培ってきた女性同士の繋がりや専門家との関係性を活かして、未曾有の人道危機に直面している女性や羊農家の子どもたちなどを対象に心理社会的ケアを提供する。

### ③ ヨルダン川西岸地区におけるごみ管理を通じた住民主体の循環型社会作り

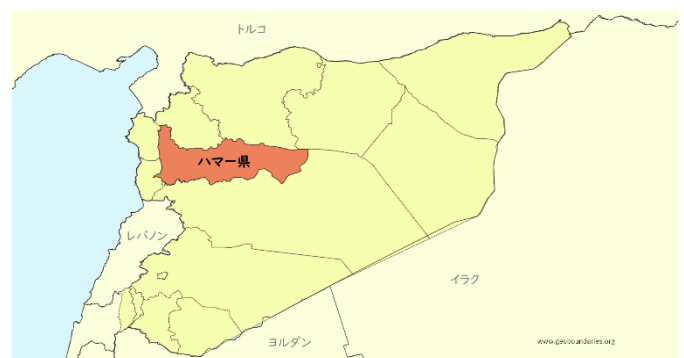
2019年度から実施してきたナブルス県北アシーラにおける循環型社会のモデル形成事業は2023年度で終了した。5年間の活動で有機廃棄物から高品質の堆肥を作る基礎を構築したが、2023年度の後半は情勢悪化のため、地域内で循環の仕組みを「見える化」する取り組みとして計画していた地域住民が集まって行うワークショップや堆肥研修などは実施しなかった。2024年度は前事業のフォローアップとして、①有機堆肥を使った家庭菜園の促進など、地域内での循環の仕組みの「見える化」のため、より実践的な活動を導入する、②生ごみ回収と堆肥舎運営を継続するため、堆肥の生産の効率化と販路拡大に取り組む。

### ④ セルフィート県ヤスーフ村での憩いの場作り

2023年度、セルフィート県ヤスーフ村にて耕作放棄地への植林の準備を進めていたが、2023年10月7日以降、村の道路がイスラエルによって封鎖されたため中断せざるを得なかった。2024年1月に準備を再開でき、2024年4月に村人と植樹会を実施して憩いの場作りを完了した。

## 3. シリア国内

2011年3月にシリア紛争が始まってから13年が経過したが、未だ終結の兆しが見えない。シリア国内では継続する紛争や米国による経済制裁、世界的な物価高騰、コレラの流行、異常気象、2023年2月の震災等の影響により、市民の生活は困窮する一方である。2023年末にはシリア国内に居住する2,346万人のうち、70%以上の1,670万人が人道支援を必要としている。720万人が避難を余儀なくされており、さらに500万人以上が近隣諸国を始めとする国外で避難生活を送っている。シリアはかつて農業大国だったが、シリア危



機以降は紛争や経済危機、気候変動などの影響により、多くの農家が農業活動の中断や縮小を余儀なくされて、農業の生産量が激減し、人びとは深刻な食糧不足に直面している。そのような状況の中、パルシックは以下の活動を実施する。

#### ① 食糧生産支援

農業県であるハマール県で食糧生産支援を行う。ハマール県はシリア政府軍と反政府勢力の6年にわたる激しい戦闘が行われた地域で、多くの住民が亡くなり、障害を負い、国内外に逃れた。また紛争により土地の荒廃、農具の盗難や破壊がもたらされ、農業は大きな打撃を受けた。パルシックは農業活動を中断、あるいは縮小している小規模農家140世帯に1年間の農業サイクルの中で必要な小麦や野菜の種や苗、肥料を始め、節水型の灌漑チューブやレンタルトラクターや燃料の配付、技術研修などを提供する。また20世帯を対象に、紛争で失われた「村の中の小さなビジネス（理髪店や雑貨屋、自転車修理や縫製など）」の再開も支援する。

### 4. レバノンにおけるシリア難民

2020年に債務不履行に陥ったレバノンでは経済情勢は悪化の一途をたどっており、全人口（難民・移民を含む）570万人のうち、約7割にあたる390万人が人道支援を必要としている。レバノンには150万人のシリア難民が居住しているとされているが、その95%の世帯は十分な食料を得ることができず、困窮状態に置かれている。そのような状況の中、パルシックは以下の活動を計画している。



#### ① レバノンにおけるシリア難民児童及びレバノン人児童への教育支援

2020年よりレバノン北部バアルベック・ヘルメール県で実施してきたシリア人の子どもたちへの教育支援事業を継続して行う。現地の提携団体と協力し、同県アルサール市内のアルイマン私立学校の空き教室を利用して、周辺の難民キャンプに居住する概ね6歳～14歳のシリア人の子どもたち170名に対して公的な卒業資格が得られる初等教育及び心理的サポートを提供し、通学支援や学用品の配布を行う。また困窮家庭のレバノン人の生徒20名にも通学支援も行う。

#### ② レバノンにおけるシリア難民への越冬支援

昨年度に続き、教育支援を行うアルサール市で越冬支援を実施する。標高約1,500mの山間部に位置する同市は、冬は雪が積もり、気温が氷点下になる寒さの厳しい地域であるが、シリア難民の大半は薄いビニールシートで覆っただけのテントで過酷な生活を強いられている。またシリア難民児童が通う学校でも、生徒たちは凍えるような教室で授業を受けている。シリア難民が厳しい冬を乗り切れるよう、暖房用燃料や防寒具等を配付する。

#### ③ アッカー県でのシリア難民および小規模レバノン人農家への食糧生産支援

2019年以降の経済危機に伴い、レバノンの農業生産は急激に落ち込み、食糧価格の上昇と食糧不安を招いている。レバノンで最も貧しく食糧不安が深刻な地域のひとつであるレバノン北部アッカー県マカイト市でシリア難民12世帯とレバノン人4世帯に対して農地を貸与し、近隣のレバノン人小規模農家86世帯と合わせ、種や肥料、灌漑チューブなどの農業物資や技術研修を提供する。また農地やビニールハウスでの日雇いの農作業に合計51名のシリア難民、およびレバノン人を雇用し、現金収入を得る機会を創出する。収穫された野菜の一部は食糧支援として近隣の困窮度の高い800世帯に配付する。

## 5. ミャンマー

2021年2月の軍事クーデター以降、抵抗する市民に対する国軍の弾圧が続いている。2023年10月には、少数民族武装勢力が国軍への一斉攻撃を開始し、戦闘は激しさを増している。3年以上も避難を続ける人びとの生活は非常に厳しい。パルシックは国軍の支配の及ばない少数民族地域において、国内避難民および困窮している人びとに対し、以下の活動を実施する。

### ① 食糧不足の人びとへの緊急の米配付

パルシックの活動地域では、クーデター前は人びとの主な仕事は公共事業か農業であったが、クーデターによって公共事業が中断したため、多くの人々が職を失った。また、農家も戦闘や避難により畑を失ったり、畑までの道のりに地雷が埋設されたり、治安の悪化により畑まで出向くことが難しくなるなどして、農作業ができず大幅な収入減に直面している。この地域の人びとの主食は米であるが、米の栽培には土地が適しておらず自分たちで生産することも困難である。そこで、食糧不足の100世帯に4回、240世帯に8回、米を配付し、食糧不足による栄養不良が少しでも緩和されるようにする。

### ② 公立学校が休校している地域での教育支援

新型コロナウイルス感染拡大の影響で2020年9月に休校となってしまっただけで以降、パルシックの活動地域では公立学校は再開していない。その代わりに、元教員や元大学生らがボランティアで子どもたちに勉強を教えているが、教科書が不足しているうえ、ボランティアであるため、いつまで教育を継続できるかは不透明である。そこで、ボランティアの教師25人に、一人あたり7,000円の謝金を4回手渡し、ボランティアの教師たちが教育を継続できるようにする。

### ③ 医療が崩壊した農村地域での医療支援

クーデター後、パルシックの活動する農村地域にあった公立診療所はほぼ閉鎖され、地域医療が崩壊した。閉鎖した診療所で働いていた医療従事者たちは、収入がなくなり、国内避難民となっている場合も少なくなく、生活が困窮している。多くの医療従事者は医療の現場から離れたが、自宅を活用したり訪問診療をしたりしてボランティアで病人の治療にあたっている。そのような医療従事者60人に一人あたり7,000円の報酬を8回手渡し、地域医療の維持に貢献する。また、クーデター後は医薬品の価格が高騰し、輸送も困難になったことから、必須医薬品も不足している。そこで、ボランティアの医療従事者が活動する10か所の簡易医療施設（主に自宅）に医薬品・医療器具を配付する。

### ④ 戦時下で職に就けない女性への生計支援

出稼ぎや荷物運びの仕事などで、男性には収入を得る機会が少なからずあるが、女性はそのような仕事を得ることが難しく、経済的に厳しい状況に置かれている。女性たちが少しでも収入を得て生活を楽にするために、30人の女性にミシンを配付し、3か月間の縫製研修を実施する。研修後に各自が仕立て屋を開業することで、自身で収入を得られるようになることを目指す。

## 6. スリランカ

パルシックは2011年からシンハラージャ森林保護区に隣接するデニヤヤ地域で、有機紅茶栽培に挑戦する小規模紅茶農家グループ（エクサ）の支援を続けてきた。2024年度6月から5か年計画で、有機栽培茶の生産性向上を目指して活動する。そのために、日本から有機堆肥づくりの専門家を派遣し、エクサの活動に参加する農家に対して質の良い有機堆肥作りと施肥方法、圃場管理技術を指導する。さらに、エクサに参加していない地域の紅茶農家にも有機栽培を普及し、地域で有機農業に取り組む農家を増やす。経済危機下の2022年度は、化学肥料が入手しづらく、有機農業への関心が高まりエクサへの問い合わせも増えていたが、2023年度は経済危機の余波で物価高騰が続く一方で再び化学肥料が入

手しやすくなり、即座に収量を上げることができ慣行農業に戻る農家も増えている。有機農業を定着させるためには、質のよい堆肥作り技術がこれまで以上に必要とされている。また、2024年度もエコツーリズムにも力を入れて、有機紅茶農家の収入源の多角化を目指す。

\*2023年度から5か年計画で実施予定だった堆肥作りの改善のための事業は、スリランカ政府との調整に時間を要し、2024年度の開始となった。

## 7. マレーシア

2008年よりペナン州の漁民組織 PIFWA(ペナン沿岸漁民福利協会：Penang Inshore Fishermen Welfare Association)のマングローブ植林活動を主に支援し、マングローブ植林教育センターを整備してきた。PIFWAの植林活動はマレーシア国内外で広く認知され、企業や教育機関、政府機関からの訪問を受け入れており、その活動で得る資金などで植林教育センターを自主運営している。2024年度はパルシックがPIFWAの植林事業を直接的に支える最終年度とし、年度の後半にこれまでの活動をPIFWAと女性グループPIFWANITAとともに振り返り、活動の成果をまとめる。2025年度以降は民際教育事業でのパートナーシップ関係や訪問交流を中心に行っていく。

## 8. 日本 能登半島

2024年1月1日に能登半島でマグニチュード7.6の地震が発生した。石川県では、全壊が8,400軒以上、半壊・一部損壊は66,000軒を超え、多くの人が家や仕事を失い、産業にも甚大な被害が確認されている。半島という地形と道路の寸断により発災直後から支援へのアクセスの難しさが課題となっていた。加えて、長期にわたる断水が被災者の暮らしをより厳しいものとしている。パルシックは1月6日に令和6年能登半島地震緊急支援を開始し能登町を中心に、①避難所、在宅被災者、仮設住宅などでコーヒーの出張提供をする『ちよっこりカフェ』の開催および物資配付を継続し、②仮設住宅に入居する世帯への生活家電の購入支援を実施する。同時に、長期的な復興支援を視野に、生業支援の調査やボランティアの受け入れ、地元住民との繋がりづくりに注力する。

## 9. 民際教育

アジアの自然環境、文化、歴史を知り、日本との関係を振り返って考えるためのプログラムとして「平和構築」「開発と環境」「アジアの歴史」「海外協力とNGOの活動」「キャリア開発」などのテーマで短期フィールドツアーを主に日本の大学生・高校生を対象に2018年度から企画提供してきた。2024年度は、マレーシアのペナンを訪問してのフィールドワークを2大学で実施する。加えて、各学校の要望に応じて日本国内の小中高生や大学生を対象に、現地の事業地と繋いでのオンライン授業および対面での出前授業を実施する。

パルシックの理念に基づいた民際教育、民際交流を助けられるよう、2024年度は現地および日本側の人材を強化し、研修などの学ぶ機会を提供する。

## 10. 日本 葛飾区 居場所づくり「みんかふえ」

東京都葛飾区での居場所づくりは、2024年で7年目を迎える。2023年度は、地域住民やボランティアに居場所運営を支援してもらい、活動に多様な広がりがあった。さらに、居場所としてのカフェや子ども食堂を運営する中で、地域で取り残されがちな人びとを見守る、地域の拠点としての役割も見えてきた。培った運営体制を発展させて、多様な人が集い、繋がる居場所を継続していくために、特に以下の点を軸に活動を進めていく。

### ① 地域住民、ボランティアとの持続的な運営体制の構築

月に一度のボランティア会議を継続し、持続的な経営の形を整えていく。その際、町内会や社会福祉協議会などの地域運営組織も交えた運営へとネットワークを広げていくことで、地域のニーズを拾い上げる体制を強化していく。

### ② 地域住民、ボランティア発案のイベントの開催

居場所づくりを再開してから、地域住民やボランティアから、みんかふえで料理教室をしたい、コンサートを開きたい、などの活用のアイデアが寄せられ実際に企画が実施され始めている。みんかふえがいろいろな人にとってやりたいことを実現できる場所となり、集いの場として広がるように、仕組みを整備する。また在留外国人が支援を受けるにとどまらず、自国の文化を伝えるなど相互に交流できるイベントも開催する。

### ③ 幅広い利用者に向けたイベントの開催

地域住民やボランティアのアイデアや特技を生かしたイベント経験をもとに、親子で参加できるような外出イベントや、若者向けの交流会など、幅広く利用者同士が交流を深められる機会をつくる。海外ルーツの高校生を対象とした授業で、自国の文化を発表したりやみんかふえでのボランティア体験などを取り入れながら学ぶ機会を提供する。また、みんかふえという場所を利用して在留外国人と地域住民やボランティアが交流を通じて互いを知る場となることを目指す。

## 11. フェアトレード

中長期的にフェアトレードを通じて大きな共助のネットワークを築けるように、2024年度は国内の取引先の拡大と関係性の構築、小売りのマーケティング強化を通じた販売増を目指し、フェアトレードを介してのコミュニティを広げていく。

2023年度の課題となった安定的な原料調達に対して、新たな生産組合や加工場との連携で調達先を増やし、取扱品目も増やすことを検討する。

緊急支援から経済的な自立のための新たな商品化ができるよう、民際協力活動を展開している事業地の製品についての調査を実施する。

環境への負荷を減らすため、取扱商品の包材を随時より環境に優しいものへと切り替える。今年度はカフェ・ティモール（粉/豆）のパッケージと紅茶3種のティーバッグ素材の刷新を行う。

## 12. 広報

団体の基盤強化のため、企業・団体との連携およびサポーターを始めとする支援者の拡大を目標に、次の施策に取り組む。①企業の社会貢献活動における協業先としてパルシックを選んでもらえるよう提案資料を整えアプローチする、②個人からの寄付について、遺贈寄付など新たな制度の導入を検討する、③連続講座などのイベントのアーカイブを支援につながるよう戦略的に活用する、④民際協力事業の助成金の途切れ目となる復興期からの経済的自立を支えるため、クラウドファンディングや社会的ファンドなどの新たな資金調達を検討する。

また、イベントやSNSでの発信においては、パルシックの活動報告だけでなく、紛争・弾圧などにより困難な状況に置かれた現地の人びとのリアリティを伝え、市民社会の一員として課題解決をともに考える場やきっかけをパルシックとして提供していく。